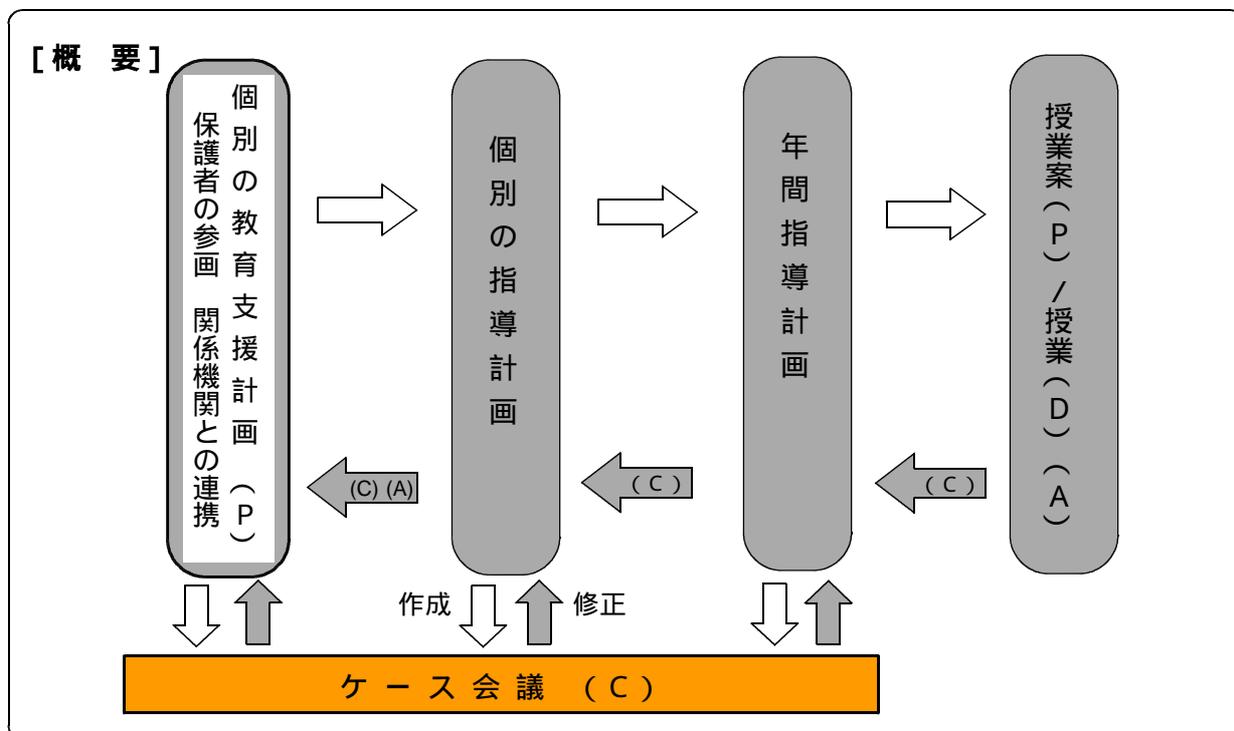


9 個別の教育支援計画に基づき、授業改善や教育的支援の充実を図る



P D C Aサイクルを活用し、授業改善や教育的支援の充実を図る

1 個別の教育支援計画

個別の教育支援計画は、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、幼児児童生徒一人ひとりの障害の実情や教育的ニーズを踏まえて適切な支援を行うために、福祉・医療・心理・労働等の関係機関等との連携・協力に基づき、保護者の同意のもとに作成する。

【個別の教育支援計画作成のステップ】

- Step 1 情報の収集 実態把握、家族の状況、保護者の要望、関係機関の情報等
- Step 2 目標（短期・中期・長期目標）の設定
学部・学年会、ケース会議での検討
- Step 3 実際の支援 校内支援体制、家庭や専門機関との連携等
- Step 4 評価・修正 学部・学年会、ケース会議での検討、保護者との協議

2 個別の指導計画

個別の教育支援計画を踏まえて、指導内容、指導方法等を、児童生徒一人ひとりの実情に応じて具体的にした計画である。

最近では、個別の指導計画を通知表とリンクさせ、指導評価に役立てている学校が増えてきた。

3 ケース会議 少人数討議法

(1) 個別の教育支援計画・個別の指導計画作成時

これらの計画の作成では、事前に保護者に教育的ニーズ資料を作成してもらい、それを基に、複数の教師、保護者、関係機関等と目標の設定や支援体制、相互の連携等を課題討議法を用いて検討することも有効な方法である。

【教育的ニーズ(保護者の願い)資料例】

生活・行動面	更衣の際のボタンの扱い
学習面	毎日宿題を出してほしい

健康面	しっかり体を動かしてほしい
その他	(医療・福祉機関等の利用) 週2回 園を利用

(2) 評価時

各学期末～長期休業中に実施されるケース会議では、当該児童生徒を担当する教師によるいろいろな生活場面をとおしての検討が不可欠である。

また、指導目標と現状に差がある場合には、問題解決討議法を用いて、より効果的な手だてや目標・指導内容の再設定を検討し、次学期に向けて準備するよい機会でもある。

【指導目標修正例】

日常 生 活 の 指 導	年度目標	
	・日常的に自力でできることを増やす	
	1学期の目標(短期目標)	評価
	・ズボンは最後まで脱ぐ、自分ではく ・シャツを手をあげて脱ごうとする ・食事中は背筋を伸ばしている ・お盆(2列目まで)に牛乳を配る	
	2学期の目標(短期目標)	
	Tシャツを自分で脱ぐことができる ズボンの着脱、食事姿勢、牛乳配りがよりスムーズにできる	

(3) 校内事例検討会

少人数での協議とは異なり、全教師が特別な教育的支援を必要としている児童生徒について多面的に理解し、指導方針について共通理解するための会議であり、問題解決討議法により検討されることが多い。

【協議手順】

事例提示	特徴的な行動の背景や支援の検討	グループ協議	アイデア・意見の整理	支援に向けての行動計画の作成
------	-----------------	--------	------------	----------------

(4) 評価会議

年度末に実施される会議では、次のような評価の観点で、授業や教育的支援が適切であったかを振り返る。

ア	児童生徒一人ひとりが自分の力で取り組める活動内容と量
イ	指導の手順や支援の工夫
ウ	どの子どもも精一杯に携われる活動内容・活動量
エ	T・Tの授業計画・実施の状況
オ	卒業後の生活につながる教育内容選択
カ	保護者や関係機関等との連携、協力の状況

この評価会議での検討をもとにし、児童生徒の変容、目標や支援方法等を見直し、個別の教育支援計画、個別の指導計画に修正を加える。

4 まとめ

個別の教育支援計画に基づいたPDCAサイクルによる授業実践で、次のような成果を上げることができる。

指導内容・手だての手掛かりが得やすくなり、教材・教具の準備がしやすくなる。

実態把握 目標 仮説 内容・期間 評価の流れが明確になる。

小学部から高等部までの12年間において、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導や支援を一貫して行うことができる。

複数の教師が、児童生徒一人ひとりの指導内容・手だて等を共通理解しやすくなる。

個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成プロセスから、教師自身の問題意識、児童生徒に対する理解や教育的支援方法の獲得等、教師としての主体性・専門性を高めていくことができる。と考える。